

権力犯罪を忘れない 許さない

— 1969年大阪扇町闘争で虐殺された糟谷孝幸君を追悼する

内藤 秀之（日本原農民・1969糟谷孝幸50周年プロジェクト世話人）

はじめに

岡山県北部に陸上自衛隊日本原演習場がある。私は岡山県奈義町に住み、日本原基地に対する反対運動をしている。演習場に接近して村があり、生活がある。演習場内には私の家の田んぼが五反。地区の神社もある。池のほとりには公会堂があり、池の取水口は演習場の真ん中を過ぎたところにある。

私は72歳で、1971年より日本原で農業、酪農を50年ほどしている。10年前からは乳牛に和牛の受精卵を移植して産ませている。その和牛も飼っている。

牛を45頭ほど飼育している。乳牛10頭、和牛20頭、和牛の子牛が15頭くらいいる。体力はあるつもりだったが、去年くらいから大変で、3割は家族で、1割は酪農のヘルパー、1割は近所の若い人に頼んでいる。私がやっているのは全体の仕事の半分くらい。朝晩、搾乳などの作業をしたら、時間が残らない生活。昨年12月初めにはそれまでかからなかったインフルエンザにかかったりした。そういうような生活をしている。

1969.11.13 扇町闘争に糟谷とともに参加する

1969年11月13日、岡山大生・糟谷孝幸（当時21歳）は大阪・扇町公園での佐藤訪米阻止集会・デモの中で権力に虐殺された（11月14日に死亡）。

60年安保闘争は国会へむけた闘争だった。七〇年安保闘争は、六九年秋、沖縄返還交渉に行くと言って訪米し、米ニクソン大統領と会談し、安保をアジアまで広げる日米共同宣言を出すのを阻止する闘いであった。それで、私が所属していたプロ学同（プロレタリア学生同盟）は、69年11月17日佐藤訪米の阻止を69年秋期決戦として闘うとした。

69年佐藤首相が訪米する11月16～17日に闘うだけではなく、10・21からの闘いで佐藤首相が訪米できないような政治状況を作り出すという積極的な闘いとして69年秋の闘いを取り組んだ。

そのはじまり、東京での10・21の闘いで、岡山大のプロ学同からも5人ほど参加したが、全員逮捕された。私は中央突破闘争の任につく予定であったができなくなり、岡山に帰ってきて事後逮捕された。だが、不起訴処分となった。他の仲間はデモの開始直後に全員逮捕、起訴された。今から思えば、この年政府は全員を逮捕するという姿勢で臨んでいた。

そして、糟谷の日記にも出ているが、10・21の次の闘いとして、11月13日の扇町公園の闘いが来た。50人ほどの部隊が鉄棒とドリンク剤ビンくらいの小さい火炎瓶を持って、警察機動隊に突入した「武装闘争」だった。

岡山で、当時動けるのは2人だけで、1人は逮捕者救援や裁判対策のために行動に参加せず、残った。参加できるのは自分1人だけになってしまって、1人で大阪の11・13闘争に参加しようと思っていた。そうしたら、プロ学同の隊列に糟谷君が加わってくれた。彼は同盟員でない一般の学生だった。当時は全共闘運動があり、彼は法科で、法科2-1(2年1組)闘争委員会で活動していた。そこで独自のビラを作ったりして運動していた、いわゆるノンセクトの学生だった。

彼を誘うために、自分がどういう話をしたのか、前述したようなことを話したと思う。彼が加わってくれて、前日12日、岡山を一緒に出発し、扇町で闘うことになった。

途中の電車で彼とどのような話をしたのか、あまり思い出せない。一晩泊めてもらったところは1メートル隣を電車が通るような家でよくこんなところで眠れるなどという場所だった。そこで一晩よく寝て、翌13日、扇町公園の集会に参加した。

この日、扇町公園では、午後4時より「佐藤訪米阻止・安保粉碎・沖縄闘争勝利」集会が開催された。反戦労働者・学生・ベ平連等の集会及び総評系労働者集会が併行して行われ、約4万人が集まった。

大阪府警は、当日、会場周辺その他に約7千人の機動隊員を配置し、公園の各入口で検問を行い、入場者に対して強制的に不法な所持品検査を行っていた。

6時頃から総評系労働者がデモ行進に出はじめた。その頃、鉄板棒(幅32ミリ・厚さ6ミリ・長さ130センチ)と火炎瓶が渡された。よくこんなものを準備し、持ち込めたなどビックリした(後からわかった。前日持ち込んでいた鉄棒が警察に発見、押収された。急ぎよベッドの部品の鉄板棒を取りに行き、6時過ぎに到着。それまで公園の出入口にいた機動隊はデモ警備にまわっていた。そのため鉄板棒を積んでいたトラックは正門から入れた)。

それを持った50人くらいの隊列がデモ隊と一緒に出て、機動隊を攻撃した。それは、その秋では一番厳しくて激しい戦いだったのではないかと思う。

自分は、足が遅いせいだけではないが、デモ隊の後ろのほうになって、自分が向かった時は、既に投げた火炎瓶で10メートルくらい先が火の海になっていた。前には進めず、デモ隊にまた戻った。

糟谷はすでに前に進んでいた。同じ場所を出発したのだから、糟谷はよほどの全力疾走をしたのだと思う。自分は遅れをとって前に進めなかった。先に進んだ糟谷たちは、持っていた火炎瓶を機動隊に向けて全部投げて、鉄板棒をふりおろした。ふりおろされた鉄板棒は大楯に食い込んだ。機動隊は一瞬ひるみ後退した。突入した部隊は、「勝てる」と思った。しかし、「機動隊は直ちに増員して、学生集団に反撃、「全員逮捕せよ」との命令の下に、『殺せ！殺せ！』と絶叫しながら警棒と楯をふりかざして襲いかかり、撲る蹴る突き倒す」(告発を推進する会「弾劾」より)の暴行を加える。更に機動隊は、後続の関西大学の学生部隊等にも襲いかかり、暴行を加えた。圧倒的な数の差(数十人対数千人)があり、数の上

でも装備の面でも機動隊を打ち負かすのは難しかった。

その中で糟谷が逮捕された。糟谷は頭蓋骨骨折の重傷を負ったまま、曾根崎署まで歩かされて、警察署で「黙秘します」とだけ言って倒れ、翌日病院で死亡した。「糟谷プロジェクト」を呼びかけていく中で、関西大学の学生2人が機動隊の暴行を受け負傷、後遺症に苦しみ、1年前後して亡くなっていたことを知った。警察権力は、1969年秋、扇町で3名の若者の命を奪った。

糟谷は警察（機動隊）により虐殺された

糟谷を逮捕した警官は3人（荒木幸男、赤松昭雄、杉山時史）。警官の1人の警棒には糟谷と同じ血液型の血痕が付いていたことが、11.13扇町闘争裁判の中でも明らかにされた。糟谷は警官3人に暴行を受けている。

自分の話になるが、68年東京で王子野戦病院反対の闘いがあって、参加した。途中、座り込んだ。そうすると機動隊は座り込んでいた全員のヘルメットを順番に取った。自分もヘルメットを取られた。

あぶない、機動隊の殺気を感じて、逃げないといけないと立ち上がりかけたら、機動隊に警棒で額を殴られた。それでも立ち上がりかけたら、もう一度正面から警棒でガンと殴られた。二度殴られた。衝撃で起き上がれず、頭をやられたらかなわんと、頭を抱えて横になったら、今度は頭を踏みつけてきた。

額を4針と2針縫った。この日の機動隊の暴行で負傷、後遺症で苦しんだ仲間が多くいたと聞く。人間の頭の正面（額）は丈夫で警棒で二度殴られたが、大丈夫でした。

糟谷の場合は、逮捕時に3人の警官に拘束された。

糟谷の検視では頭部に何か所か傷を負っている。前の傷は正面にいた警官から警棒で殴られた傷だと思う。糟谷は頭の真上も怪我している。横や後ろにいた警官に殴られた傷だと思う。糟谷は前から、上から、横から、後ろから殴られた。おそらく、上と横と後ろから殴られたのが致命傷になったのだと思う。自分の経験から、額の骨は丈夫で警棒で殴られても割れない。後ろや横から殴られ、致命傷になったと思う。

糟谷は手にも怪我をしている。糟谷は警官に捕まってヘルメットを取られて、手で頭を防御した。それを機動隊員が手をはがしたり、手の上から警棒で頭を殴ったりしたのだろう。

糟谷は足にも傷がある。捕まって転がされるというか、転がらざるを得なくなる。そこをさらに蹴られた傷だと思う。そうして、全身が傷だらけになり、頭に致命傷を負った。

どう考えても警察の虐殺に間違いない。数千人の警官が過剰警備を行った。数十人の部隊に何倍もの警官が暴行を加え、虐殺を行った。

警察は警備、逮捕の権限はあっても、逮捕した者に暴行を加え殺人する権限はない。しかし王子野戦病院反対闘争のころから、デモ参加者に対して殺人的暴行がくり返された。

69年秋期は、デモそのものを認めず、デモ隊を全員逮捕、殺人的暴行が加えられた。

告発・付審判請求を行う

機動隊員の警棒には糟谷と同じ血液型の血痕が付いていたと分かっている。

11月15日大阪からはじまり、岡山、加古川で、12月14日には東京日比谷野外音楽堂で1万人が集まり「糟谷君虐殺抗議人民葬」が行われた。愛知、金沢、福岡等延べ1万5千人が集まり、人民葬を行った。

こうして糟谷虐殺抗議、弾劾の声が大きくなる中、12月14日、91名が、逮捕3警官を大阪地方検察庁に告発した。しかし、1971年9月7日、大阪検察庁は、不起訴処分とする。翌9月8日「特別公務員暴行陵虐致死罪」で大阪地裁に付審判を請求した。大阪府警は裁判官の忌避を申し立て、警官の出廷、発言を拒否するなど、真相究明を拒み続けた。76年11月13日時効となり、付審判闘争は終わる。

糟谷は明らかに虐殺された。権力・司法はそれを無視した。それどころか、火炎瓶が頭に当たった傷だという「法医学者」＝御用学者も出てくる有り様だった。

一年程して、糟谷の父に会った。父親は実際に遺体を見ているので、「身体は傷がいっぱいだった。無数の傷があった。頭の傷だけではなかった。孝幸は警察に負傷させられて、殺されたんだ。昔の時代だったら敵を討ちたい」と言われた。

私は毎年11月、加古川の糟谷の墓前に行って、糟谷の分まで自分も頑張るからと。糟谷を虐殺して平気である権力を倒すことでしか、糟谷に応えることはできないんだと、一生懸命いろんなことをしてきた。

69年秋期 11.13 闘争をふりかえって

10・21から始まる69年秋期の闘いを、どんな闘いできて、次にどのようにつなげていったらいいのか。自分もなかなか考えをまとめる時間ないというか。どう総括するか。まとめにくいという状況だった。

一つは、糟谷の闘いというのは、10・21の闘いへの権力の弾圧で大打撃を受け、残っている仲間も少ない中、佐藤首相が訪米できないような政治状況を作り出すんだと必死に攻勢的に闘った。それが1969年11月13日の闘いだった。

あきらめずに、しかも実力で闘う。何とか政治状況を変えていくという闘いだった。

先日、津山での講演で浜矩子さんが「状況は変わるし、変えられる」と話していた。当時、私たちも、10・21で全員が逮捕された状況にめげずに、さらに挑戦し、佐藤首相が訪米できないような政治状況をつくり訪米を阻止するんだということで扇町の闘いをした。

その自分たちで何とかするんだという粘り強い闘いが、その後の日本原、三里塚の闘いに引き継がれていった。

1969年11月13日の闘いは、その後の70年代の実力闘争が多かった時代に引き継がれていった。その大きな力になった。

78年三里塚の闘いで管制塔を占拠し開港が阻止されたとき、69年に必死で闘ったことがあったから、その経験が生かされ、地の利を得て勝利できたのではないかと感じた。

二つ目には、糟谷もそうだったが、ベトナム戦争時代の学生運動の理想は高かった。ベトナムに多い時は50万人の米兵が派兵された。あらゆる兵器、化学剤を使ってベトナムを攻撃して焼きつくし、老若男女を問わず殺した。その時代に核空母エンタープライズ佐世保入港（1968年1月）があり、負傷した米兵を運び込む王子野戦病院があった。沖縄からは戦闘機が飛び立った。

70年安保はそれらを確認し、日本のベトナム戦争加担をさらに強めて、安保条約をアジアまで広げていくというものだった。運動として、ベトナムの人々を考えて、ベトナム戦争に加担する自国政府に対して闘う。日本政府に参戦国化をやめさせるんだと。素晴らしい国際主義だった。いまの安倍政権は、ベトナム戦争時の子や孫の世代の人たちを外国人労働者として、利用しようとするが、何の反省もない。先日もドクちゃんが米軍が使った枯れ葉剤の影響が今もあることを告発していた。安倍政権が地球儀を俯瞰し、100カ国以上を訪問したと自慢しても、国際主義とはほど遠い。

三つ目に、糟谷は「黙秘します」を最後の言葉に亡くなった。糟谷自身、それ以上の言葉を発する力はなかったと思う。糟谷の最後の「黙秘します」という闘いが、その後の三里塚をはじめ闘う仲間を激励し、反彈圧の闘いにつながった。いろんな闘いの中で、糟谷の「黙秘します」の闘いがその大きな力になったと思う。糟谷を引き継いで、糟谷の「黙秘します」という闘いをやるんだと、糟谷が支えになったと思う。それでその後の弾圧は最小限に抑えられたのではないかと思う。

糟谷の闘い、69年秋期11月13日扇町の武装闘争をどう総括するのか。一言で言うのは難しい。69年秋期の闘いを考えていくと「どんな社会をめざすのか」「それをどんな方法で実現するのか」という課題と重なってくる。

糟谷は必死で闘って命を失った。日米共同宣言を阻止すると。だが、日米共同宣言は出され、現在の安保法制につながっている。

日米共同声明が出たということで、私は日本原で日米共同声明路線を阻止していくのだと日本原に行く。私は11・13の件で逮捕・拘留されていたが、70年2月か3月に保釈されて、鉄工所で9月まで働いていた。そうして、仕事しながら、70年2、3月から日本原に行く。その後、1971年2月日本原で農民となり、演習場反対の運動を今日まで続けている。

糟谷プロジェクトへのご協力をお願いします

1969年11月13日、佐藤訪米阻止闘争(大阪扇町)を闘った糟谷孝幸君(岡山大学法科2年生)

が機動隊の残虐な警棒の乱打によって虐殺され、21才の短い生涯を閉じてから50年が経過した今も忘れることができない。

当時救援連絡センターの水戸巖さんの文には「糟谷孝幸君の闘いと死は、樺美智子、山崎博昭の闘いと其の死とならんで、権力に対する人民の闘いというものを極限において示したものだ」(1970告発を推進する会冊子「弾劾」から)と書かれています。

糟谷孝幸君は「…ぜひ、11.13に何か佐藤訪米阻止に向けての起爆剤が必要なのだ。犠牲になれというのか。犠牲ではないのだ。それが僕が人間として生きることが可能な唯一の道なのだ。…」と日記に残して、11月13日大阪扇町の闘いに参加し、果敢に闘い、機動隊の暴力により虐殺されたのでした。

あれから50年。

残念ながら糟谷孝幸君のまとまった記録がない。

当時の若者も70歳代に。今やらなければもうできそうにない。

そこでうすれる記憶を、あちこちにある記録を集め、まとめ、当時の状況も含め、本の出版で多くの人に知ってもらいたい。そんな思いを強くした。

70年安保ー69秋期政治決戦を闘ったみなさん、糟谷君を知っているみなさん、糟谷君を知らなくてもその気持ちに連帯するみなさん

『1969 糟谷孝幸 50周年プロジェクト (略称：糟谷プロジェクト)』にご協力ください。

5月、この「糟谷プロジェクト」の呼びかけを発して以来、「山崎博昭プロジェクト」の方々と出会い、多くの支援・助言をいただいた。全国の仲間からもたくさんの共感・激励が寄せられている。これまで、150名近くの呼びかけ人・賛同人の方々に参加、応援いただいています。

現在3つの事業に取り組んでいます。

- ①糟谷孝幸君の50周年の集いを開催する(2020・1・13)
- ②1年後の2020年11月までをメドに公的記録として、本を出版する。
- ③その為の賛同者・基金を募る(1口3000円)

ひとりでも多くの方の、ご賛同・ご協力をお願い申し上げます。

(「季刊ピープルズ・プラン」86号に掲載)

■糟谷関係資料

- 1 機動隊による虐殺の事実をあばく
「弾劾」（糟谷孝幸君虐殺事件告発を推進する会）

A5で36頁、表紙が人民葬の写真。発行年月の記載がぬけてますが、1970年9月発行。糟谷さんの遺稿、水戸巖・今井和登・佐藤耕造の文章、会の趣意書・アピール、告発状が掲載されている。

- 2 「明日への葬列」（高橋和巳編、合同出版、1970年7月）

副題「60年代反権力闘争に斃れた10人の遺志」で60年代に死亡した樺美智子から中村克己の10人を紹介。糟谷孝幸さんの章（104～125頁）を執筆したのは長沼節夫さん。岡大生の証言、朝日・サンケイの引用、関西救対本部発表事実経過が収録されている。山崎プロジェクトの山崎健夫さんから、紹介をいただきました。現在病床に。

- 3 新聞記事・付審判闘争を含め裁判関係資料（宮田さん所蔵）

新聞記事	1969 (S44) 11.15付	神戸新聞、東京タイムス、読売、毎日、産経
	1970 (S45) 11.15付	毎日新聞
	1972 (S47) 5.30付	毎日新聞
	1972 (S47) 8.22	毎日新聞

公判調書 第33回～35回、第36回、第37回、第38回、第410回、第41回

供述調書

付審判請求事件書類

証人尋問調書 松木

冒頭陳述書 18人

起訴状

「弾劾」1号～5号 歌詞生や孝幸君虐殺事件告発を推進する会機関紙

被告団通信 No.1～16

- 4 アサヒグラフ、朝日ジャーナル（大宅壮一文庫他）

- 5 岡山大学新聞（1969年12月15日号）

（見出し）糟谷君（J2）虐殺さる！ 11.13阻止闘争
警棒による乱打 弁護団・告発裁判闘争へ

6 婦人民主新聞（1969年12月26日号）

（見出し）“喪の女たちの葬列” 岡大 糟谷孝幸君の市民葬

1カ月後に婦民岡山中央支部（準）の有志の呼びかけで心をこめた市層葬が営まれました。60余人が集まり、関西救対の今井和登さんが報告。デモなどしたことのない大勢のお母さんが、母としていま黙っているのは再び戦争につながる権力の専横を許すことになると、喪服デモをした様子が報告されている。その後、加古川の生家を訪れ、両親と面会した様子も。

7 「昏い死の告知に答えよー糟谷孝幸追悼集」

コムネの会（法二・クラス闘争委員会）発行の追悼集

8 金城実さん作の「レリーフ」

1977、虐殺8周年の日に、と記されている。

9 『抑圧するものすべてに災いあれ』（糟谷君虐殺を許さない会）1976年12月

九州で開かれた糟谷君虐殺7周年集会の記録

桑野博・西山浩介・石崎昭哲・花崎皋平さんの発言が収録されている。

10 『戦士は土の下でもなお詩い続ける』

大阪での69戦士糟谷同志集虐殺弾劾10周年追悼集会の記録。

告発を推進する会事務局長の宮田雅弘さん、前田俊彦さん、花崎皋平さんなどの報告が掲載されている。

11 共労党機関紙「統一」（69年11月24日号・347号に）

党中央常任委員会とプロ学同岡大支部の声明、佐々木治（岡大支部）の追悼文、佐藤訪米阻止闘争の記事が載っている。

12 機関紙「新左翼」 糟谷虐殺抗議特集号

13 苅野さんから上記10周年集会の写真提供 6枚